
機械仕掛けの幻

朝倉 大地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの幻

【Nコード】

N3885A

【作者名】

朝倉 大地

【あらすじ】

建物も、道路を走る車も、町そのものがすべて機械で作られた「DATECITY」。ありとあらゆる技術の最先端を走るこの町で初めて極秘の人体実験が行われた。しかし実験台が失踪しパニックに。町に住む学者の卵の青年は仕事をサボるために帰宅途中、うっかりその実験台を保護してしまう・・・

●●●
ピ

⋮
⋮
⋮

「臓器確認完了」

人口臟器移植完了

ピ
・
・
・

ピ
・
・
・

.....

「博士！！！」

「どうした、騒がしい」

「実験体が逃げました！！」

「なんだと！！？」

はあっ・・・はあ・・・

・・・いじは・・・

どっ・・・

いきなりつかまって・・・

あの、天井からまぶしい光を下ろされて・・・

ドウシテ、ナゼ、ナンノタメニ

逃げた。

逃げたけど

私は
・
・
・
・
・
・
誰
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

目の前には数え切れないほどのビルや建物が並んでいる。地面には、あの忌まわしい機械でできた車が走っている。これらはすべて政府の奴らが開発した「機械」で作られた。

『DATE CITY』

この町は化学や工学、生物学などさまざまな分野で常に最先端を誇る。

にしてはなんのひねりもない、微妙な名前。

皆さんお元気ですか？

・・・そんなこと聞けるようなところじゃない。

町の中は機械だらけ。

外は車の排気ガスで空気は見事なまでに汚れきっている。

それでも人間はみんな、機械に頼って今までも、これからも生きようとしている。

機械がダメだとか言ってるんじゃないけど、最近の人間は自分の力で何かをしようとする考えをなくしてしまった。

なんでこうなっちまったんかな
ま、俺にはまったく関係ないけど。

・・・ここで自己紹介しとく。

俺の名前はエドヴァリス・エミール。

通称エドヴァ。もしくはエド。

世の中の流れに流され、今の職業は学者の卵。

今は卵とかそんなこと関係なしに大学の研究に引ッ張りだこ。

人手が足りないんだって。助手してます。

まあ学者・・・になりたかったっばいから別にいいんだけど。

大学ってのは、この『DATE CITY』にある「ホスピタル」というところ。

大学兼病院って感じ？

別にここに来たくて来たんじゃないけど

他にも大していい職場があつたわけでもないし。

それに訳あつて町から出られないんだよね。

まあその訳はいまいちよくわかんないけど。

政府が町から出ることを禁止してるから。

この町の中でしか生活してはいけない。

子供の頃からずっとそう言われつつづけてきた。

なんの疑問も持たずに。

あそこは有名っちゃ有名な場所で、すごい学者がいたんだとか。

まだ外に出られたときは世界で有名になった学者もいたとかいないとか。

はつきり教えてくれないんだよね。

全部あいまいで。

でもまあ他に行くとこないわけ

一応入ったわけですが

はつきりいつて、いい気はしない。

上司は実験実験。

俺たち新入社員はほったらかしで実験。

目で見て盗めみたいな？

普通の化学実験とかならまだいいんだけど

最近特に動物実験ばかりやってる。

そりゃ、自分の研究したことを実験するのはいいさ。
でも

命は大切にしないと、ね

え？俺？

何してるって？

別に何もしてないよ。

いや、ホントに何にもしてないわけじゃない

一応研究だって家でしてるし

とはいってもたいしたことは出来ないけど

世の中クローン人間とかそういう類のものしか考えらんない奴達とは違って俺は純粋な科学者だからね。

どういう成り行きでこんな機械仕掛けになっちゃったんだろうね、
この町は。

あ、もう遅刻かな。

急ご……

……

「・・・・・・・・・・？」

「なんでこんなばたばたしてるわけ？」

「あのさ、サード。なに？これ」

「あーエド！今までどこにいたんだよ！！」

「どこって・・・・外」

「早く手伝え！！」

「はあ？」

「実験体が逃げ出したんだ！！」

「実験体・・・・」

「またか。」

「そりゃ誰だってなんだって動物実験？だかんだかわかんねえけど自分の体で実験されるんだったら逃げ出すよ。」

「これで何匹目だ？」

「で、今回は何が逃げたの」

「そんなこと言ってる場合じゃないって！」

「だってどんなのか分からなかったら探しようがないじゃない」

「・・・・・・・・」

「ほら、早くしないと」

「・・・・・・・・」

「ほら」

「・・・・・・・・人間・・・・だよ」

「ふーん・・・・」

は

「サーディアスくん．．．えーっと。聞き違いかな？今人間って．．．」

「そうだよ．．．やっちゃったんだよ．．．とうとう．．．！！
だから早く探せ！！」

「はあ．．．」

「つかとうとうと言ってる場合じゃないんじゃないのか．．
何やってんだよ．．．」

結局、病院内には実験体らしい人間はいなかった。

つてかその前に俺、どんな奴かしらねえつて。

．．．．．

かわいそうな奴だな。

病院内にいないってことはあれだな。

外にいるんですか。そうですか。

それって、さ。

微妙にヤバげ？

だめじゃん

その前に何の実験してたんですか。

知らないよ

知らないよ？

知らないよ。

病院内にいてもすることないし、帰ろっかな．．．（不良社員）

それで本日２度目の機械の町。

家に帰ってもやることないしなあ。

その辺ぶらぶらしてくかな。

右を見て、左を見て。

それでもやっぱり機械機械。

どこでも機械。

木とかあるのかないのか。

むっこーこーうの方にちょびつと緑といえるか言えないか
らの物体が見える。

かな？

虫なんかいるもんか、こんな町に。

ゴツキーくらい？

動物実験。

どっかから捕まえてきたねずみを主に実験台にしている。

他は猫とか鳥とか。

人間以外だからいいってもんじゃないって

なんにだって、命はあるんだ。

「じょうだんじゃねえ」

空は黒くすさみ、夜なんだか昼なんだかいまいちわかんない。

ぶらぶらしてもこんな空気の悪いところについてまでもいられるわけ
がない。

最近ちょっと顔を覚えられちゃった店に顔を出すことにしよう。
そうしよう。

「あれ、エドヴァとかいうひと」

「あんだ、客に向かってそれはないんじゃないかな？別にいいけど」

この人はこの店の店員のラリア・リリイ
ちなみに店主はオーガス・キオール

この二人、なんかあやしい関係とのうわさ

ラリアは金髪美人だけど性格はめちゃくちゃおっさん。
嫁入り前なのに。

俺はいつも頼んでる名前はよく知らない紅茶を頼んだ。
店主のオーガスは不在らしく、ラリアがてきぱきと紅茶をカップに
入れて俺に渡した。

「ひまなんだね、この店」
「時間帯がそうなの」

ただいまの時刻午前11時。
この時間みんな外にある箱の中で一生懸命働いている。
機械まみれで。

「あんたこそひまそうだね」
「そういう職業なんで」

ぼつりぼつり話をしていると店主のオーガスが入ってきた。

「あ、オーギ。おかえり」
「ただいま。エドくんいらっしやい」
「どーも」

このオーガスってひと、めちゃくちゃ人がいい。
つてか来るたびににかくれるんだよね。
俺が来る時間がいつもこんな時間だから。

「あ、今日はおいも持ってきたんだよ。食べる？」
「もらいます」

「あんた遠慮くらいしろよ」

「いいジャン、いつものことだし」

わきあいあい。

これでこそ人付き合い。

カラン・・・・・・・・

「いらっしやい」

「あ！チビ太ー！」

入ってきたのはもしかして小学生かと思うほどちっちゃい奴だった。
こいつもここの常連。

実年齢で15か6くらいだったかな？

「・・・・・・・・・・あんた、無職？」

「うるへー」

「働きなよ」

「・・・・・・・・・・」

「まあまあ。ジャトウ君もいつもの？」

「・・・・・・・・ツス」

こいつの名前はジャトウ・アディ

まあ。どうでもいいんだけど。

ガキのくせに生意気。

いや、ガキだから生意気なのか。

今の時代、こいつ位の年代でも働かなければならない。

もちろん機械まみれで。

まあこういう子供は力仕事中心だけど。

で、いつも町のはずれに行って堤防だかなんだかよく分からないも

のを作っている。らしい。
忘れたよ、もう。

「ジャトウ君、休憩？」

「サボリ」

「オイ・・・」

「いいんだよ。ばれても走らされるだけだし」

現場監督・・・名前、なんだっけ？

「あのおじさん微妙に甘いんだよね」

「クラタさんね」

ああ、そうだ。

クラタ・テド

なんかどつかのお偉いさんらしい。
家がなんかの家元とか。

そっちの道にすすめばいいのに。

俺の時からずっとクラタが現場監督。
がんばるねえ

給料いいのかな

俺もやろっかな

・・・

毎日毎日こんな微妙な生活してる。

俺は紅茶を飲み干し、店を出た。

もち、芋も食ったよ。

もう家に帰ろう、そうしよう。

きつたない箱と箱の間を通って近道近道

こんな裏道通る奴なんて俺ぐらいしかいないでしょ

-
-
-
-
-
-
-

ゴン

なんか蹴った。

[illegible]

足？

足・・・・・・・・ですか？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あし、」

足

足・・・・？

なんで足？

よく見ると人が倒れてる。

なんだ・・・・・・・・最近よくみるホームレスか・・・・・・・・

でも・・・・・・・・

「もしもーし」

まあとりあえず声かけてみる。

だってさ、そのまま素で地面に倒れてるんだよ？

俺だって命を語るんだ。

それくらいするよ

その生きてるんならそのまま放置！w

相手するのめんどくさいよ

ってか

「うわぁ」

めっちゃ若いジャン

女の子。

見た目俺よりちよい下くらい？

わからん。女って歳わかんねえんだよな

なんか、顔色がとても優れないご様子・・・

「・・・ヤバげ？」

死ぬか？

・・・とりあえず連れて帰る。

朝起きたときのままの俺のベットに寝かせて、ぬらしたタオルで汚れた顔をふいてやる。

「やっぱメチャ若いジャン」

つやつやお肌

・・・何言ってたんだ

こんな若いお嬢さんがあんなところで倒れてるってことは・・・
なんかあった？

この流れで行くと何かの組織に追いかけてるとか？w
なんつって

・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

そしき

って

まさか

まさか

こいつが？

こいつが、今朝探してた実験台？？

んなアホな。

でも時間的に・・・

町からは誰も出られないわけだし、

逃げたしたのは朝方・・・だっけ？

だから

あ、それじゃ俺

実験台保護しちゃったわけね

つてのんきに言ってる場合じゃない

とか言ってる間にその実験台が目覚めました。

「あ、起きた」

なんとも展開の早い・・・アレだね。どれだよ

「・・・・・・・・う・・・・・・・・」
「あ、」

どうしょ

とりあえず優しい言葉をば

「大丈夫？あー、倒れてたよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だいじょぶ？」

「あんた、だれ」

「は」

は・・・・・・・・

なんじゃそりゃ

いきなりそうくるか

まあ分からなくはないけど

一応名乗っとくか・・・

「俺はエドヴァリス・エミール。あんたは？」

聞かれたら聞き返すのが常識。

もう即行で聞いちゃうもんね

「私は・・・」

はいはい

「・・・・・・・・」

うんうん

．．．．．

「．．．．．」

ん？

．．．．．

沈黙．．．．．長つ

「な、なんて名前？」

さすがの俺もたじろぐよそりや

「．．．．．私．．．．．」

うんうん

「わかん．．．．．ない」

はあ。

はあ？

記憶喪失？

．．．まじっすか

え、

ってかどうすんの？じゃね

「えーと。こういつときはどうすんだろ」

目の前にいる、病院で探していたらしい実験台さん……のような人。

別に本当にそうだっていう確信は持てないし全然断定はできない。

「ねえ、」
「」

「へ？」

まあ、とりあえず会話は出来そう。

「えと、ここは俺の家」

「あんた誰」

「……さっき名乗ったつちゅーの」

「エドヴァ」

「ふーん」

「ふーんっておい」

自分のことはどうなんだ

「あの……エドヴァ、さん？頼みたいことあるんだけど」

はいはい、なんですかな。

出来れば君の正体がわかるようなことがいいんだけどね。

「私の名前、教えてくれない？」
「は」

「なんでやねーん」

マジでなんでやねーんって感じ。
こっちが聞きたいっつの

「何、本当にカスでも覚えてないの？」
「うーん・・・」

実験台ちゃんは腕を組んでうなった。

「うーん・・・出てこない」
「・・・」

そんなこと言われても
教えてとかまずムリ。

こっちだって初対面だっつの

「あ！」

実験台が隣のビルで日の光があまり入らない窓から外を見ながら急に声をあげた。

「なに？」

「ユキ」

「雪？」

「そう。ユキ」

「何？降ってる？」

「違う、名前」

「なんかかわいい名前だね」

「そう？」

ついに自分の名前を思い出したらしい。

まあどうでもいいけどよかったね。

実験台の名前はユキ。

これはこれで、まあ一件落着？

「じゃあ」

「は」

と思ったら、

なんと、ユキは追われている身？なのにこの家から出ようとしてい

る。

なんつー奴

「まってよ」

「なんですか」

・・・いつちょ引っ掛けてみるか

「どこ行くの？」

「出るんです」

「どこから？」

「この町から」

「ムリだよ」

「どうして？」

「そついう決まりだから」

「でも行きます」

「どうして」

「・・・つかまるから」

・・・

ビンゴ

やっぱりこいつが今朝探してた実験台だ。

俺が一応関係者ということは伏せといたほうがいいか・・・

「じゃあ余計にそのへんふらふらしてたら捕まるんじゃないの？」

「でもここにいてあんたに迷惑掛けたらイヤだから」

・・・

ん？

俺、何？

かくまおうとしてんの？

目の前ではつるつるお肌のユキちゃんが今もなお外へ出ようとしている。

俺はそれを見て引き止めている。

ああ、そうか

「お願いだからここにいて」

「外行くか」

「え、外？さっきまでダメだって言ってた」

「気が変わった。行こう」

かくまうならかくまうなりの対処はする。

出られないのは知ってる。

でも

出ないと

俺は――

「なんで？どこ連れてってくれるの？」

「町の外」

「出られないって言ったじゃん」

「予定が変わった」

「へーえ」

ユキは俺の顔をマジマジと見つめている。
照れるなあ、なんでやねん

「何・・・」

「エドヴァさんって町の外行ったことない？」

「ないよ」

「へえ、私あるよ」

・・・

ん？

「で、いつ行くの？」

「早めに」

「じゃあ今から行こう！今から！」

「はあ？」

「早めの出発！」

「そうだけど・・・」

まあ・・・いいか。

そのへんにあつたかばんに金とお菓子つめて

まるで遠足気分で家を出る準備。

帰って来る気はない。

仕事とか家とか、未練はない

対人関係・・・は

本日二度目の行き付けの店。

「あれ、エドヴァくん2回目だ。めっずらしい」

「いいジャン、べつに」

「まあオーギが儲かるだけだし、いいけどね」

「あんななあ・・・」

「・・・って、その子友達？」

ラリアはユキを見ながらいった。

「ああ、ユキ。」

「ドーモ」

「どーもv私ラリアだよ」

「・・・それにしてもやっぱり暇なんジャン、この店」
「出てく？」

「いや、いいっす・・・」

包丁を持って男を脅す女のどこに魅力を感じるんだ、この店主・・・

「で、なんでまた2回も来たの？」

この店には結構世話になったし
とりあえず挨拶しに来ただけです

「あのさ、俺もうこれないかもしれないから、よろしく」
「は？なんで？」

「・・・まあ、いろいろあつて」
「意味わかんない」

オーガスが店の奥から出てきた。

「あれ、エド君こんにちわ。さつきぶりだね」
「オーギい、なんかもう来ないんだって」
「え？どうして？」
「え、っと。とある事情がありました・・・」

「エドヴァさん、町出て帰らないの？」
「ユキ、それ言っちゃだめなのに・・・」
「え、エドくん町から出るの？」
「えーと」

まあいまさら隠してもしょうがないか……

「あんたらだから言うけど……」

「なに？ 深刻な話だったら奥で聞くけど」

「うーん……まあすぐ終わるからいいよ」

「そう？」

「ユキ……追われてるんだ」

「はあ」

「そうなの？」

「……なんか反応薄いなあ

「だから、見つからないように逃げようとしてるわけ」

「ふーん。で、今から行くんだ」

「そゆこと」

「愛だね」

「……？」

「あ、でも」

オーガスが微妙な会話の間を割って入った。

「今の時間帯って堤防作ってるんじゃない？」

「あ」

「ねえ、テイボウってなに？」

忘れてた

今の時間、1時過ぎ

休憩が終わってるくらいの時間

夜まで待つか

・
・
・
・

夜になると確か堤防は見張り番しかいなくなる。
それまでここでじっとしておくか

それにしてもひまな店だな

そう思っていると店に新たな客が入ってきた。

細目の女みたいで魔法使いみたいな変な格好の奴（男）と、格闘家
みたいな筋肉男。

「やあ。ゲンキ？」

「あー！ー！エリー！ー！フェイさん！ー！ひっさしぶりー！ー！」

「ほんとだよ、どうしたの？」

「ちょっとそこまできたから・・・」

見たことのない客。

まあ昼間しか来ない俺が知ってる客もそういないけど
ラリアとオーガスの友達・・・だろうな

「あいかわらず店長くさいね、この店」

「ひどいなあ」

「フェイさん元気？」

「うん。ラリアは？」

「元気元気！ー！」

4人の中で会話が弾む。

どうやら「エリー」が細目で「フェイ」が筋肉男らしい。

俺とユキは二人で端のほうの座席でくつろいでいた

が、ふと4人のほうに目をやると
細目の方のエリーと呼ばれてた男がじっとこちらを見つめている。
キモイ

「オーガス・・・彼らは？」

「ああ。エド君と・・・」

「ユキちゃん」

俺たちの名を聞くと、エリーは静かに近づいてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・君達」

「ん？」

さっきまで細かった目は開かれて
多分全開。

怖

「なんか用？」

「君達・・・やばいね」

「？」

「死相が出てるよ・・・」

「は？」

は

何、こいつ

「エリーは占い師なんだよー」

「ラリア、そんなこといつて場合じゃないよー！どっいついことだ、
エリー！！」

「言っただけさ。彼らには死相が出てる」

「・・・最近エリーの占いよく当たるんだ・・・」
「フエイさんまで・・・!!」

なんだ、細目は占い師か。

つてか話が見えないんですけど？

彼ら？君達？俺ら？

死相？

死ぬのか

「ねえ。私が死ぬの？」

しばらく口を開かなかったユキがとんでもないことを聞き出した。

「君だけじゃないよ、彼も。」

「エドヴァさんも・・・？」

「な、なんで！？なんでそんなに言い切れるんだよエリー・・・そんなこと・・・」

「オーガス・・・」

なんか本当に話が見えないんですが

俺抜きで話が進んでる気がする

店主は必死に俺たちに見える「死相」というのを否定しようとしてる

「いつ？」

「ん？」

「いつごろ死ぬのか教えてください」

「ユキちゃん!？」

「だって、いつ死ぬか分かるんだったらそうならないようにできるかもしれないよ」

「死ぬとは限らないよ!!」

「でもほぼ確定だよ」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

へえ

今夜、ね

「そう・・・ですか」

「ユキ？」

「エド君・・・ユキちゃん・・・」

「エドヴァさん」

会ったときから表情一つ変えなかったユキは少し苦しいような、つらいような顔をしてる。

「あんた、このままここで普通に暮らしたほうがいいよ」

「は？」

「多分、今夜っていうことは私を探してる奴が来るからだよ」

「何言ってるの」

「目的は私だと思うから。他人を巻き込めない。・・・ねえ、占い師さん」

「何？」

・ ・ ・ ・ ・

何、俺

「エドヴァさん、この町にいたら助かる・・・よね」

守られてる？

「私と一緒にいるから死相とか出てるんでしょう？」

「・・・まあ」

「だったらこのまま何もなかったようにしてたら助かる・・・」

「俺は助かる気なんかない」

ああ

「お前だけ行かせるわけには行かない。外は、危ない・・・から。多分」

「エドヴァさん？」

さつきと同じだ

この感じ

俺は――

ユキ、俺は

「私とあなたは関係ないから巻き込むわけには・・・」
「関係あるよ」

拾う前から関係あったよ

関わってた。

俺はホスピタルの科学者の卵。

ユキを探していた病院内の奴らと同じ。

イコール、ユキを実験台にした奴らの仲間

「十分に関わってるんだよ」

「エドヴァさん・・・」

そう

でも

「何があっても、誰にも、何にも、お前は殺させないよ」

ああ

変だ

俺は

やっぱり

そうなんだ

あの病院に就職した時点で、
路地でユキをみつけた時点で、
家につれて帰った時点で……

俺のしてることにうそはない。

俺の、心の中で感じた

この変な感じ。

俺は忠実に従ってる

ユキを守る。

これは

ただの偽善

俺は

偽善者なんだよ、ユキ——

現在午後八時

俺とユキは二人で町の外へと繋がる堤防へと向かった。

この時間帯、数ある街灯の下を歩く人間はいない。

皆自宅で夕食をとったり家族みずいらずでくつろいでいるんだろう。
この汚い町で。

堤防へ着くまでには距離がある。

その道、俺とユキは手をつないで歩いた。

俺たちはあの会話をしてから一言も話をしていない。

手をつないでいるのもラリアに無理やりつながされたと言ったほうが早いかもしれない。

別に放す理由もないし、ユキも嫌がっていないし。

人の命を守るためなら

俺の、この気持ちに従うためなら

何だってするよ

堤防に近づくと、建物の数が減るため明かりもどんどん減っていく。
空を見上げても、星のひとつも浮かんでいない。

それどころか月すら見えない。

すると、ユキが突然立ち止まった。

「？」

俺の手を握るユキの手に力が入った。
顔を覗き込んでも、暗くてよく見えない。

このとてつもない高さの堤防を前に、ユキは少しだけ震えていた

「ユキ」

「やっぱり、エドヴァさんは・・・」
「ヤダね」

俺は一度決めたことはよっぽどのことがない限り曲げない。はず。
ましてや命がかかっているとかなんなの

俺の偽善心を揺さぶるようなもんだ。

俺たちは堤防の見張りに見つからないように隠れながら少しずつ前
へと進んだ。

思ったより数は少ない。

むしろいないほうがいいような感じ。

隙について、まだ堤防ができていないところに回り込んだ。

・・・

あっさりと町から出ることができました

見張りの意味あるのか？

「・・・」

ここでつかまるとまずいのでとりあえずもつと先に進むことにした。
町からずっと離れていくと、排気ガスかなんかで真っ黒く染め上げ

られた空は少しずつ晴れてきて、しばらくすると満天の星空を拝むことができた。

「……キレイ」

「うん」

空には星以外にも月が、まるでストレス発散をしているかのようにまぶしいくらいに黄色く光っている。

ドサッ

「!？」

無意識のうちにその場に座り込んでいた。

もうちょっと、ゆっくりこの空を見ていたかったから。

今なお手は握っている状況なので、いきなり座り込んだ俺につられてユキも思い切りしりもちをついた。

良かったことに、コンクリートの地面ではなく砂地だったから怪我はなかった。

というかこんな場所じゃなかったら俺も座らない。

ユキはそのまま、俺の隣にひざを立てるようにして座りなおした。

「……さみしいね」

月の光に照らされたユキの顔は何の感情もなかった。
視線はずっと先で。

町を出て、空を見ながら歩いた。
空だけを。

小さいころ、堤防を作っていた時のことを思い出したくなかったから。

空はきれいだけど

それに合致するキレイな風景はそこにはなかった。

後ろを振り向けば馬鹿でかい機械でできた町。

目の前には

延々と続く砂漠。

少し遠くには気が数十本かそこらぐらいの木がぼつぼつと並んでいる。

わかってたんだ

町から出ても

何もないことくらい
でも

この感情をもっと、味わいたかった。

ユキと一緒にいれば、この気持ちは消えることはない、この感情

人として決断していいと言い切れない、この「偽善」のころ
自分で自覚してるぶん余計にいいとはいえない。
それでも俺は

ユキは腕を伸ばし、遠くのほうを指差した。

「あそこ」

声は小さく、まるで思い出話でもするかのように

「私、あそこからきたの」

暗くて見えない

でも、ここではないものがある

っというか

「思い出したの？」

今まで会話した中で、思い出したことといえば名前だけ。
急に思い出した割には普通だな

「ううん、知ってたの」

「？」

ユキは、座ったまま俺の方へ倒れてきた。

ちょうど、その辺によくいる地味なカップルを連想させるように、
頭を肩に乗せて。

その状態でユキは話を続けた。

「なんで来たかはわからないけど・・・あそこからこの町に来たの。
そしたらつかまった」

「へえ」

短い文章だけど

人体実験で記憶をなくした訳ではないことは、わかった。

.....

.....

「つかまった後何されたの」

肩にもたれかかるユキに反応はなかった。

知らないのか、はたまた言いたくないのか
わからないけど

とりあえずもう聞かないほうがいい、のだろう。

しばらくの間、沈黙だった。

すこし長く居すぎたらしい。

風で砂を吸い込んでいたみたいで、お互い少し咳き込んでいる。

「そろそろ行くか」

「・・・うん」

俺は先に立ち上がって、ユキが立ち上がる手助けをする。

その瞬間、辺りが見えなくなるほどのまぶしい光に包まれた。

俺たちの体は光に包まれ風景は徐々に変化していき、気付けば全く別の場所にい——る訳がない。

まぶしいくらいの光は、大量の車、しかも砂漠を走るために作られたであろう特殊な形をしているもののヘッドライトだった。

車は俺とユキのいるところを大きく取り囲んでいた。

ああ

見つかった

まぶしくて何も見えない。

声だけ聞こえた。

『貴様らどこへ行くつもりだ』

外だよ

外にいくんだよ

ユキを、元居た場所に

連れて行くんだ

ほっとけよ

簡単に出られるようにしてるほうが悪いんだろ

絶対他にも出て行った奴いるって

なんで俺らだけ捕まえに来るんだよ

俺にしては文句が多い。

何かおかしい。

大量の車の中から一人、俺たちに向かってやってくる奴がいた。
見えない

けど

嫌な予感がする。

・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

まじかよ

「やあ、元気かね。エドヴァリス・エミールくん」

予感的中。

奴は

病院の、しかも俺の付きである上司。

シュウジ・ヤスオカ

はつきりいつてこいつ、キライ

なんかよくわからんが会話していると妙にむしずがはしる

「しばらくだね。最近僕の講義に出てくれないじゃないか」

「
・
・
・
・
・
」

俺はユキをかばいながら後ずさった。

ユキは俺の服を握り、恐怖に耐えている。

こいつと関わるとろくなことが起きない・・・
起きたことないけど。

俺らしくない。

こんなことで動じる俺じゃないはずなのに
こいつだけは・・・

「おや、理由がないのに出てくれないのは興味がないからかな？そ
れとも、僕がキライだからかな？」

「・・・後者だよ」

「ははは、君は正直だなあ」

ヤスオ力はどんどん近づいてくる。

押されるかのように俺は後ずさってしまう・・・

「じゃあどうやったら君に嫌われなくてすむのかなあ？」

「うるさい、近寄るな」

「うーん、それはできないなあ」

ヤスオ力は歩きながら、俺の方を指差した。

・・・

いや

俺じゃなく、その後ろ・・・

「その子、渡してもらえるかな？」

ユキ

「その子、渡してもらえるかな？」

ああ

やっぱり

こいつだけは

どうしても

「・・・エ、ドヴァ・・・さん」

後ろではユキが恐怖で、俺よりも後ずさっている。

やっぱり、こいつが

「あんたが・・・やったのか」

「そうだよ、世の中で最も危険だった。でも、こうして生きている。奇跡じゃないか」

ヤスオカは自分に勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

キモイ

キモイ

キモイ

「そういえば、君は知っているのかね？ 僕の研究内容を」

・・・

朝、実験体が逃げたと聞いたとき
人体実験としか聞かなかった。

というより、皆知らなかったんだ
ただ、流れに乗って探すだけ探して・・・

「しょうがない。君は僕直々の部下だからね。教えてあげるよ」

あいつがこの言葉を発した瞬間、ユキが

ユキが俺から離れた

ユキはそのまま地にへたり込み、俺に恐怖の表情を見せる

ダメだ

その先は

「人体臓器すべてを機械に変えるのさ。内臓も、目も、脳さえも」

ユキの目から光が消えた
もう、俺をも映さない

そうか・・・ユキ
知らなかったんだ
自分がどうなったのか

「その子はとってもいいときに『帰ってきて』くれた。これは絶好のチャンスじゃないか。『外のこと』を人に話される前にすべてを取り替えてしまえばすべて丸く収まる。それに僕の研究の役にも立ってくれる。最高だね!」

この高笑いが、俺の背すじを逆なでる。
俺の足元でユキは小さく泣いた

俺が、「やつら」の関係者だったこと
自分が、もう「人間ではない」こと
二つを一度に
信じていたものを
一度に失った

ああ
どうしてだろう
こんな小さいユキを見て
こんなにも胸が締め付けられる

これも

これも、『そう』なのかな

ヤスオ力は自分の演説に熱が入っている。
俺たちへ向けていた足もいつの間にか止まっている。
演説はまだつづく

「そう。まだ終わっていない」

「あの時まだ手をつけていなかったからね」

ヤスオカは人差し指を立て

静かに自分の頭に近付け、トントン、と小さく指摘した。

人間の身体の中で一番複雑で、一番重要な場所

こいつは

本当に

「さあ、僕の研究内容も聞いたことだし。その子をこちらへよこしなさい」

あいつは再び歩き出した。

それと同時に

車から武装した大勢の人間が出てきた

逃げなきゃ

ユキ

ここにいたら

ダメだ

お前は

元いた場所に

・・・・・・

元いた、場所

『帰ってきた』んだ
そうだ

ユキがいたのは

ああ
そうか

じゃあ
いいんだ。
ここで

終わりなんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3885a/>

機械仕掛けの幻

2011年1月29日14時25分発行